

中国古典文学大系

40

平凡社

聊齋志異 上

蒲松齡 作 増田涉・松枝茂夫・常石茂 訳

訳者紹介

増田 渉 1903年島根県生。東京大学文学部支那文学科卒。1977年没。専攻 中国文学。主要訳著書『魯迅の印象』(講談社)『中国文学史研究』(岩波書店)『中国小説史』(翻訳・岩波書店)『魯迅選集』(共訳・岩波書店)『苦社会』(平凡社)

松枝茂夫 1905年佐賀県生。東京大学文学部支那文学科卒。専攻 中国文学。主要訳著書『周作人隨筆集』(改造社)『紅樓夢』(岩波書店) 曹禺『日の出』(平凡社)『中国笑話選』(平凡社)

常石 茂 本名 柳沢三郎 1915年大阪府生。東京大学文学部中国文学科卒。1982年没。専攻 中国文学。著訳書『新論語物語』『新春秋左氏伝物語』(河出書房)『戦国策』(平凡社)『韓非子』(角川書店)

中国古典文学大系 全60卷

聊齋志異(上)

第40巻

1970年4月6日 初版第1刷発行
1983年5月6日 初版第13刷発行

定価 2,500円

訳 書 常 石 茂

東京都千代田区三番町5番地
発行者 下 中 邦 彦

郵便番号 102
発行所 東京都千代田区
三番町5番地
振替・東京8-29639 株式会社 平凡社

不良本のお取扱は直接読者サービス係まで
お送り下さい (送料は小社で負担します)。 印刷 東洋印刷株式会社
お送り下さい (送料は小社で負担します)。 製本 株式会社 石津製本所

© 株式会社 平凡社 1970 Printed in Japan

例　言

一、本書の底本には、張友鶴輯校『会校会注会評本　聊齋志異』(一
九六二年　中華書局版)を用いました。

これに伴い、増田・松枝・常石の旧稿は、すべて底本と照合して
各自訂正しました。

一、各篇には、便宜上、通し番号と訳題とを添えました。

一、必要事項については、各篇の終わりに後注を付しましたが、簡単
なものは本文中に（　）でくくって挿入しました。

なお、例えば(50注)とあれば、通し番号50の篇の注[参考]と
いう意味であります。

一、度量衡・科挙・風習等に関する語の中に、訳さず原語のまま使
用したものがありますので、これらについては巻末に「原語略解」
を付して解説しました。

一、訳者の解説中、「呂註」とあるのは呂湛恩註、「何註」とあるのは
何垠註のことです。これらについては「解説　四」に誌しました。

一、訳注に、『戦国策』の齊策へ23へなどとある番号は、東洋文庫
(平凡社刊)所収の拙訳『戦国策』の通し番号であります。

一、訳者の署名のない篇は常石が訳出したものであります。

一、本上巻には、紙幅の関係上、全十二巻中、巻六の前半までを收め
ました。

目 次

1	城隍神になる試験 (孝城隍)	一	12	情誼に厚い幽鬼 (王六郎)	一八
2	耳中人 (耳中人)	五	13	桃を盗む少年 (偷桃)	三
3	追いかけて来る死屍 (尸変)	七	14	魔法の梨の木 (種梨)	四
4	水を噴く怪 (噴水)	九	15	壁抜けの術 (勞山道士)	五
5	瞳人の会話 (瞳人語)	九	16	老僧の身代わり (長清僧)	六
6	壁画の中の少女 (画壁)	二	17	蛇使いと蛇 (蛇人)	七
7	山 艦 (山舡)	四	18	うわばみを斬る (研鱗)	八
8	幽鬼に噛みつく (咬鬼)	五	19	犬 姦 (犬姦)	三
9	狐を捉える (捉狐)	五	20	電 の 神 (電神)	三
10	蕎麦の鬼 (抜中怪)	六	21	狐の嫁入り (狐嫁女)	三
11	屋敷の怪 (宅妖)	七	22	美貌の女医 (嬌娜)	七
29	真定の女の子 (真定女)	九	23	罰をうけた破戒僧 (僧孽)	四
28	幽靈屋敷 (鬼哭)	九	24	妖 術 (妖術)	四
27	瓶に入った狐 (狐入瓶)	九	25	野 狗 子 (野狗)	四
26	前世の記憶 (三生)	九	26	前世の記憶 (三生)	四
30	焦螟道士 (焦螟)	一〇	27	野 狗 子 (野狗)	四
31	妾 教 (葉生)	一〇	28	幽靈屋敷 (鬼哭)	九

前世の応報 (四十手)	32	前世の応報 (四十手)	32
仙人 (成仙)	33	仙人 (成仙)	33
奇怪な訴訟 (新郎)	34	奇怪な訴訟 (新郎)	34
同好の老翁 (靈官)	35	同好の老翁 (靈官)	35
心がけ (王蘭)	36	心がけ (王蘭)	36
泥棒をつかまえた神 (鷹虎神)	37	泥棒をつかまえた神 (鷹虎神)	37
羈あわせ (王成)	38	羈あわせ (王成)	38
青鳳 (青鳳)	39	青鳳 (青鳳)	39
人間の皮 (画皮)	40	人間の皮 (画皮)	40
狐を退治した少年 (賈兒)	41	狐を退治した少年 (賈兒)	41
蛇が好物 (蛇癖)	42	蛇が好物 (蛇癖)	42
笑う女 (婁寧)	48	笑う女 (婁寧)	48
北の中庭にいた娘 (轟小倩)	49	北の中庭にいた娘 (轟小倩)	49
義憤鼠 (義鼠)	50	義憤鼠 (義鼠)	50
夢中のおかしさ (地震)	51	夢中のおかしさ (地震)	51
五色の花の咲く島 (海公子)	52	五色の花の咲く島 (海公子)	52
一飯の徳 (丁前溪)	53	一飯の徳 (丁前溪)	53
大魚の墓参 (海大魚)	54	大魚の墓参 (海大魚)	54
大すっぽん (張老相公)	55	大すっぽん (張老相公)	55
水莽草 (水莽草)	56	水莽草 (水莽草)	56
畜生づくり (造畜)	57	畜生づくり (造畜)	57
鳳陽の夢 (鳳陽士人)	58	鳳陽の夢 (鳳陽士人)	58
冥土から逃げて來た男 (耿十八)	59	冥土から逃げて來た男 (耿十八)	59
後金子供 (珠兒)	60	後金子供 (珠兒)	60
小人の官員 (小官人)	61	小人の官員 (小官人)	61
伴侶 (祝翁)	63	伴侶 (祝翁)	63
狐の姉妹 (胡四姐)	62	狐の姉妹 (胡四姐)	62
背中に生える羊の毛 (某公)	65	背中に生える羊の毛 (某公)	65
凄い刀 (快刀)	66	凄い刀 (快刀)	66
侠女 (俠女)	67	侠女 (俠女)	67
前世の応報 (四十手)	32	前世の応報 (四十手)	32
仙人 (成仙)	33	仙人 (成仙)	33
奇怪な訴訟 (新郎)	34	奇怪な訴訟 (新郎)	34
同好の老翁 (靈官)	35	同好の老翁 (靈官)	35
心がけ (王蘭)	36	心がけ (王蘭)	36
泥棒をつかまえた神 (鷹虎神)	37	泥棒をつかまえた神 (鷹虎神)	37
羈あわせ (王成)	38	羈あわせ (王成)	38
青鳳 (青鳳)	39	青鳳 (青鳳)	39
人間の皮 (画皮)	40	人間の皮 (画皮)	40
狐を退治した少年 (賈兒)	41	狐を退治した少年 (賈兒)	41
蛇が好物 (蛇癖)	42	蛇が好物 (蛇癖)	42
笑う女 (婁寧)	48	笑う女 (婁寧)	48
北の中庭にいた娘 (轟小倩)	49	北の中庭にいた娘 (轟小倩)	49
義憤鼠 (義鼠)	50	義憤鼠 (義鼠)	50
夢中のおかしさ (地震)	51	夢中のおかしさ (地震)	51
五色の花の咲く島 (海公子)	52	五色の花の咲く島 (海公子)	52
一飯の徳 (丁前溪)	53	一飯の徳 (丁前溪)	53
大魚の墓参 (海大魚)	54	大魚の墓参 (海大魚)	54
大すっぽん (張老相公)	55	大すっぽん (張老相公)	55
水莽草 (水莽草)	56	水莽草 (水莽草)	56
畜生づくり (造畜)	57	畜生づくり (造畜)	57
鳳陽の夢 (鳳陽士人)	58	鳳陽の夢 (鳳陽士人)	58
冥土から逃げて來た男 (耿十八)	59	冥土から逃げて來た男 (耿十八)	59
後金子供 (珠兒)	60	後金子供 (珠兒)	60
小人の官員 (小官人)	61	小人の官員 (小官人)	61
伴侶 (祝翁)	63	伴侶 (祝翁)	63
狐の姉妹 (胡四姐)	62	狐の姉妹 (胡四姐)	62
背中に生える羊の毛 (某公)	65	背中に生える羊の毛 (某公)	65
凄い刀 (快刀)	66	凄い刀 (快刀)	66
侠女 (俠女)	67	侠女 (俠女)	67

卷二

氣狂いじみた苦行僧 (金世成)	43	氣狂いじみた苦行僧 (金世成)	43
狐に魅入られた男たち (董生)	44	狐に魅入られた男たち (董生)	44
石を食う隠士 (巖石)	45	石を食う隠士 (巖石)	45
醜女に化けた怪 (廟鬼)	46	醜女に化けた怪 (廟鬼)	46
首のすげかえ (陸判)	47	首のすげかえ (陸判)	47

笑う女 (婁寧)	48	笑う女 (婁寧)	48
北の中庭にいた娘 (轟小倩)	49	北の中庭にいた娘 (轟小倩)	49
義憤鼠 (義鼠)	50	義憤鼠 (義鼠)	50
夢中のおかしさ (地震)	51	夢中のおかしさ (地震)	51
五色の花の咲く島 (海公子)	52	五色の花の咲く島 (海公子)	52
一飯の徳 (丁前溪)	53	一飯の徳 (丁前溪)	53
大魚の墓参 (海大魚)	54	大魚の墓参 (海大魚)	54
大すっぽん (張老相公)	55	大すっぽん (張老相公)	55
水莽草 (水莽草)	56	水莽草 (水莽草)	56
畜生づくり (造畜)	57	畜生づくり (造畜)	57
鳳陽の夢 (鳳陽士人)	58	鳳陽の夢 (鳳陽士人)	58
冥土から逃げて來た男 (耿十八)	59	冥土から逃げて來た男 (耿十八)	59
後金子供 (珠兒)	60	後金子供 (珠兒)	60
小人の官員 (小官人)	61	小人の官員 (小官人)	61
伴侶 (祝翁)	63	伴侶 (祝翁)	63
狐の姉妹 (胡四姐)	62	狐の姉妹 (胡四姐)	62
背中に生える羊の毛 (某公)	65	背中に生える羊の毛 (某公)	65
凄い刀 (快刀)	66	凄い刀 (快刀)	66
侠女 (俠女)	67	侠女 (俠女)	67

68	酒 友達（酒友）	一三	84	久遠の恋（魯公女）	一一
69	狐妻と幽鬼妻（蓮香）	一三	85	道士のあいさつ（道士）	一一
70	癡 の 孫（阿宝）	一四	86	狐との交誼（胡氏）	一六
71	根を培った狐（九山王）	一五	87	奇 術（戲術）	一九
72	隙のあった道台（遵化署狐）	一五	88	托 鉢 僧（丐僧）	一九
73	兄弟奇縁（張誠）	一五	89	狐 や ら い（伏狐）	一九
74	汾州の狐（汾州狐）	一六	90	蟄居していた竜（蟄竜）	一九
75	荒れ塚の縁（巧娘）	一六	91	櫃の中の子供（蘇仙）	一九
76	二つ城隍（吳令）	一六	92	冥土の裁き（李伯言）	一九
77	八色の声（口技）	一七	93	断袖奇縁（黃九郎）	一九
78	狐の対聯（狐聯）	一七	94	路傍で笑っていた女（金陵女子）	一〇四
79	驢馬を嫌う狐（離水狐）	一七	95	宣聖と帝君と菩薩と尊者（湯公）	一〇五
80	義 俠（紅玉）	一七	96	閻 魔（閻羅）	一〇七
81	竜（竜）	一七	97	青 い 鳥（連瑣）	一〇七
82	女亡靈の詩（林四娘）	一八	98	魔術をつかう道士（單道士）	一一三
83	卷 三		99	飛んで行つた腕輪（白玉玉）	一一四
103	江 上 の 怪（江中）	一八	100	夜叉の徳（夜叉國）	一一〇
101	塚穴の小人（小醫）	一一〇	101	西方の僧の話（西僧）	一一〇
102	上 に は 上（老饕）	一一〇	102	上 に は 上（老饕）	一一〇

104	一笑の知己（連城）	一一八
105	悪ふさけの報い（霍生）	一一三
106	蹴鞠奇談（汪士秀）	一一四
107	復讐する女（商三官）	一一六
108	狼退治（子江）	一一八
109	一言で悟った女（小二）	一一九
110	烈婦の奇跡（庚娘）	一二〇
111	因果応報（宮夢鴉）	一二一
112	九官鳥（鵠鴟）	一二二
113	豚になった狸（劉海石）	一二三
114	幽鬼に禁止令（論鬼）	一二四
115	鬼の眼玉（泥鬼）	一二五
116	夢の別れ（夢別）	一二九
117	紅い肌着（犬燈）	一二〇
118	異人僧の不思議（番僧）	一二一
119	狐のよみがえらせた女（狐妾）	一二二
120	雷公（雷曹）	一二三
121	博奕の護符（賭符）	一二〇
122	古い根を抜いた報い（阿霞）	一二一
123	冥土の誅罰（李司鑑）	一二二

卷 四

124	五羖大夫（五羖大夫）	一二七
125	相手相応に化けた狐（毛狐）	一二七
126	洞府の春（翩翩）	一二〇
127	黒い獸（黒獸）	一二三
128	不思議な甕（余徳）	一二五
129	いぱりと矢（楊千総）	一二七
130	瓜の変異（瓜異）	一二七
131	すがすがしい小間使い（青梅）	一二七
132	羅刹の海市（羅刹海市）	一二五
133	屍の義行（田七郎）	一二〇
134	竜を生む（產竜）	一二九
135	飛鳥の早業（保住）	一二〇
136	往き違い（公孫九娘）	一二〇
137	こおろぎ合わせ（促織）	一二八
138	柳と蝗（柳秀才）	一二〇
139	お天道さまにも恩怨（水災）	一二一

5 目 次

140	千古第一の大笑（諸城某中）	三三
141	福運の数（庫官）	三三
142	冥府から帰る（鄆都御史）	三四
143	眼なし竜（竜無目）	三三
144	諧謔狐（狐諧）	三三
145	錢 雨（雨錢）	三五
146	強盜を撃つ妾（妾撃賊）	三〇
147	妖怪退治（駆怪）	三一
148	素直さの福運（姉妹易嫁）	三三
149	宰相の夢のあと（続黄粱）	三六
150	水を汲む竜（竜取水）	三七
151	小っこい狹犬（小狹犬）	三七
152	碁の鬼（碁鬼）	三七
153	助けられた馴（辛十四娘）	三七
154	妖遁の術（白蓮教）	三七
155	二つ提灯（双灯）	三七
156	狐と幽鬼をやつつける（捉鬼射狐）	三七
157	恩義に酬いた驥馬（蹇賛債）	三七
158	回転する首（頭滾）	三九
159	冥土の料理（鬼作筵）	三九

卷

五

160	姿なき若様（胡四相公）	一〇
161	騙り屋（念佛）	一〇
162	蛙の音曲（蛙曲）	一七
163	鼠芝居（鼠戲）	一七
164	不平と妖怪（泥書き）	一七
165	しのんでくる女神（土地夫人）	一七
166	冬に咲いた蓮の花（寒月芙蓉）	一七
167	酒の報い（酒狂）	一七
168	出世のもと（陽武侯）	一八
169	義虎（趙城虎）	一九
170	蛇を捕つたかまきり（蟻娘捕蛇）	一九
171	拳法（武技）	一九
172	餓のなかの小人（小人）	一九
173	酒ほしさ（奏生）	一九
174	狐の妓女（鴉頭）	一九
175	酒虫（酒虫）	一九

木彫の人形（木雕美人）	176	緑衣の女（緑衣女）	196
情魔の劫（封三娘）	177	寡 婦（黎氏）	197
追憶の狐女（狐夢）	178	狐の恩返し（荷花三娘子）	198
短い上着をきた男（布客）	179	あひる泥棒（罵鴨）	199
狐百まで（農人）	180	怨 毒（柳氏子）	200
死を偷んだ女心（竜阿端）	181	狐 仙（上仙）	201
餽 託 婆（餽託婆）	182	猿 仙（侯靜山）	202
金 永 年（金永年）	183	銭 の 流 れ（錢流）	203
放 生 奇 縁（花姑子）	184	批 評 狐（郭生）	204
薄情の応報（武孝廉）	185	応報迅速（金生色）	205
洞庭湖の公主（西湖主）	186	西湖から来た女（彭海秋）	206
脇腹の肉を切る（孝子）	187	墓地の争い（墳輿）	207
獅 子（獅子）	188	怨 念（賣氏）	208
やきもちと閻魔の罰（閻王）	189	くしゃみの怪（梁彦）	209
寡婚の生んだ実子（土偶）	190	竜 の 肉（竜肉）	210
役所に落ちた亡靈（長治女子）	191		
忠 犬（義犬）	192		
鄱陽湖の神（鄱陽神）	193		
儒者の娘（伍秋月）	194		
蜂の国の公主（蓮花公主）	195		

卷 六

211 冥界から科された罰（醫令）

四六

緑衣の女（緑衣女）	196	寡 婦（黎氏）	197
狐の恩返し（荷花三娘子）	198	狐 仙（上仙）	201
あひる泥棒（罵鴨）	199	猿 仙（侯靜山）	202
怨 毒（柳氏子）	200	銭 の 流 れ（錢流）	203
狐 仙（上仙）	201	批 評 狐（郭生）	204
猿 仙（侯靜山）	202	応報迅速（金生色）	205
銭 の 流 れ（錢流）	203	西湖から来た女（彭海秋）	206
批 評 狐（郭生）	204	墓地の争い（墳輿）	207
応報迅速（金生色）	205	怨 念（賣氏）	208
西湖から来た女（彭海秋）	206	くしゃみの怪（梁彦）	209
墓地の争い（墳輿）	207	竜 の 肉（竜肉）	210
怨 念（賣氏）	208		
くしゃみの怪（梁彦）	209		
竜 の 肉（竜肉）	210		

当代切っての女上位 (馬介甫)	四九
魁星の夢 (魁星)	五〇
寝返った報い (庫將軍)	五〇
花神の檄 (絳妃)	五〇
梁間の君子 (河間生)	五〇
不実の報酬 (雲翠仙)	五〇
踊る神 (跳神)	五〇
大力の男 (鉄布衫法)	五〇
大力の將軍 (大力將軍)	五〇
白蓮教の妖術 (白蓮教)	五〇
鈍い夫と聰い妻 (頽氏)	五〇
好色の戒め (杜翁)	五〇
節度を守った酬い (小謝)	五〇
幽靈の首くくり (縊鬼)	五〇
呂祖仙の功德 (呂祖仙画工)	五〇
聖妻 (林氏)	五一
梁上の狐 (胡大姑)	五一
荔枝の縁 (細侯)	五一
狼の話 (狼三則)	五一
美人の首 (美人首)	五一

地図	232
原語略解	233
解説	234
一撫での縁 (蕭七)	235
狐の生まれ変わり (劉亮采)	236
仙女の花嫁 (董方)	237
山の神 (山神)	238
一撫での縁 (蕭七)	239

聊
齋
志
異

上

常
石
茂
茂
夫
訳

松
枝
夫
夫
涉
作

増
田
涉
齡
齡

蒲
松
松
齡
齡

題 辞

姑く妄りに之を言え 姑く之を聽かん

豆棚瓜架

雨は糸の如し

料るに應じ人間の語を作すを厭いて

秋墳に鬼の唱うを聞くを愛するの時なるべし

——漁洋老人題

聊齋自誌

三周氏（古代の大詩人屈原）は、蘿を披り薜荔を帶とした女神に感じて「離騷」を作ったし、長爪郎（唐の詩人李賀）は、牛鬼や蛇神のことを詩によむのが病みつきとなつた。これらはみな自然に鳴り出した声なのであるから、それが好い音であるかそうでないかは問うところでなく、由来おのづからそうなのである。

私は魑魅と光を争おうとする哀れな秋の螢火であり、罔兩に笑われるはかない野馬にすぎない。だが干宝（中国最初の小説集『搜神記』の著者）の才も持たぬのに、かねて神を捜索することを愛好し、また、人に鬼を談らせて喜んだ、かの黄州の知事（蘇東坡）と、その気分を同じくする。で、そういう話を聞くと、すぐ筆をとって小説の形にまとめた。さらにもう、長い間には、四方の同好の士が、便に託して資料を送つて下され、かくして、好きなればこそ物は集まるというわけで、積むところますます多くなつた。

甚だしいのは、化外の民でもない人の話であるのに、時として断髪の郷（荆蛮は文身断髪といふこと、『史記』に見える）の事よりも奇なる奇事があるし、目の前の瞳ほど身近な話にも、飛頭の国（首のとぶ民族のこと）は『博物志』や『拾遺記』に見える）の怪にもまさる怪談があることがある。「遙ち逸興を飛ばす」（唐の王勃の句）というような氣違ひめいた気持ちがどうしても抑えきれぬままに、「永く曠懲を託し」（李白の句）で、癡人といわれようとも、あえて意としなかつた。まじめな人々は、

きっと私をよい笑いものにしはせぬかと思う。だが五父衛頭（町の四辻の意、『礼記』檀弓篇の語）にくだらぬ話を妄りに聴いて、三生石（浙江省杭県天竺寺の裏山にある石。三生は、前世・現世・後世をいう。唐の円觀が牧童に転生して李源とここで再会したという故事が『甘沢譜』に見える）上にささか前生の因果を悟つたのである。たとえこれが放埒無残な話であつたとしても、必ずしも人をもつて言を廃すべきではなかろう。

私が生まれ落ちる時に、亡父の夢枕に病みやつれた僧侶が立ち現わされた。その僧は片肌ぬいで部屋にはいって來たが、青銅錢大の円い青薬を乳のわきに貼つていたそうである。父が夢から覺めるのと同時に、私は生まれたというが、なるほどその証拠にほくろがついていた。また小さい時分から病弱で、とても長生きは覚束ないだらうといわれた。私の家庭は非常に寂しく、僧院のように寒々としていたし、筆耕生活の身入りの乏しさは、まるで鉢のようであった。時に懊惱のあまり、頭を搔きむしつては、ひとり考へるのだった。あの僧侶こそは、ことによつたら自分の前身ではなかつたろうか。つまり煩惱のゆえに、死んで天上に帰すことができずに、風のまにまにただよつて、ついにこうして垣根や廻に落ちた花のよくな具合になつてしまつたのではあるまいか。と、六道（天道・人道・魔道・地獄道・餓鬼道・畜生道）茫茫としてもとより知る由もないが、この想像は必ずしも全く理由なしとはしないだらう。深夜ただひとり、燐々たる燈火の暗く燃えつきようとする、寂しいひつそりした書斎の中で、氷のように冷たい机にうち向かい、腋（狐の腋下の皮）を集めて裘（きぬ）を綴るように、おぞましくも古人の『幽冥錄』（六朝宋の劉義慶の著）の跡をつぎ、あるいは杯に酒を浮べつつ筆をとつて、ようやくにして『孤憤』（韓非子の一篇）の書を書き上げたのである。私がこれに寄せた感慨は右のとおりである。また悲しむにたりよう。

ああ、霜に驚く冬の雀は、樹を抱いても温むことができない。月に向かって泣く秋の虫は、欄にすりよって自分の身を温めようとする。私を知ってくれるものは、多分あの「青林墨卷」（杜甫の詩「李白を夢む」の句）の間にいるものたち（鬼狐を指していふ）ではあるまいか。

康熙己未（十八年、一六七九年）春日

（松枝）

卷一

1

城隍神になる試験（考城隍）

「どうか試験において願います」という。公が、「試験官もまだお見えになつていないので、今ごろ試験があるわけはない」

私（蒲松鶴）の姉婿の祖父にあたる人は宋公、諱は熹といつて、この県（山東省淄川県）の廩生であつた。ある日、病氣で寝ておられると、役所の下吏が書付を持ち、額の白い馬を引いて来て、



「このたびそなたの孝心に免じて九年間の休暇をつかわす」

といつてみたが、下吏は何もいわず、ただしきりにうながすので、病氣を押して馬に乗り、ついて行くことにした。途中の道筋は全然見えがなく、まもなく、ある町に着いた。まるで帝王の都のようであった。やがて役所にはいつてみると、実に壯麗をきわめたつくりである。上手にお役人が十何人も並んでおられ、いずれも知らぬ人であったが、関帝（関羽のこと、神に祀られて關帝といふ）だけはそれとわかつた。廊下に机と腰掛が二つずつ置いてあり、公より先に一人の書生がその下手の方に腰掛けっていた。公はそこで彼と並んで掛けた。机の上にはそれぞれ筆や紙があつた。やがて問題の紙が渡されたのを見ると、

「一人二人、有心無心」

と八字書いてあった。二人は文章を書き上げて殿上に差し出した。公の文章の中に、

「心有りて善を為せるは善と雖も賞せず、心無くして惡を為せるは惡と雖も罰せず」

とあつたのを、諸神はしきりにほめ合われた。そして公を近く召し寄せて、

「河南省に城隍神の欠員がある。そなたはその職にふさわしい」といられた。公はそこではじめてそれと悟り、ひれふして泣きながら、

「かたじけなき思ひ召しまことにありがたく、言葉をかえ

すのも憚られる次第でございますが、何分わたくしには七十になる老母がございまして、わたくしのほかに養つてやる者がありませぬ。何とぞ母が寿命を終えますまで、ご徵用をご猶予下されとうございます」

とお願いされた。上手にいた帝王の様子をした神が、さっそく母の寿命を書いた帳簿を調べるように命じた。長い鬚の下吏が帳面を擡げ持つてばらばらめぐり、

「あと九年の寿命がございます」

と申し上げた。神々はどうしたものかと、ちょっとためらっていると、閑帝が、

「がまわんでしょう。一時張生に代理をさせ、九年たって交替させればよいわけです」

といわれた。閑帝はまた公にむかい、

「ただちに赴任すべきところ、このたびそなたの孝心に免じて九年間の休暇をつかわす。期日になつたら呼び出すであろう」

といい、それからもう一人の書生には何やら激励の言葉を賜わった。二人はお辞儀をしていつしょに退出したが、その書生は公の手を握つて公を郊外まで送り、自分は長山(山東省)の張某であるといい、別れの詩を贈ってくれた。詩の文句はみな忘れたが、その中に、

花有り酒有り春常に在り
燭無く燈無く夜おのずから明るし

という句があった。

宋公はかくて馬に乗り、別れて帰られたが、郷里に着くや、はつと夢から醒めたようだった。その時は死んですでに三日たつていた。母

が棺の中のうめき声をきいて、助け出すると、半田もしてやつと口がきけるようになった。念のため長山をたずねさせると、果して張某なる者がその同じ日に死んでいた。

その後九年して、母は果して死んだ。宋公はその葬式をすませると、

湯浴みをしてから、自分の部屋にはいって死なれたのである。

宋公の岳父の家は城内の西門内にあつたが、公が不意に美々しく飾つた馬に打ち乗り、大勢の供の者を従えて、堂にあがつてお辞儀をして出て行かれたので、みなみなびっくりして不思議がつた。まさか公が神様になられたとは知る由もなかつた。田舎に行ってたずねてみると、すでに死なれたあとであった。

公が自分で書かれた小伝があつたのだが、惜しいことに兵乱(明末清初の際)の後なくなつてしまつた。これはその大略にすぎないのである。

注

一 城隍神 城は城壁、隍は城壁の外側にはりめぐらされるが、らぼりのことで、したがつて城隍で都市を意味する。城隍神は、民間に信仰されていて了都市の守護神。民間信仰では、最高神を玉皇帝といい、これが冥界にあって政府を組織し、それぞの部署に官僚を任命して、冥界を統治するばかりか、現世を守護・監視する。城隍神もその官職のひとつだが、生前の土地に功勞のあつた者が任せられる場合もある、とされていた。

なお、12注三、37注一。

(松枝)

2 耳中人(耳中人)

譚晋玄はこの県(山東省淄川県)の生員だった。導引の術に心をうぱ